反実仮想を表す日本語表現について

谷　口　秀　治

1．はじめに

おそらく汎言語的な現象であろうが、人間の言語には、ある出来事を述べる際に、事実をありのままに述べる言い方と、事実とは反対の事を述べる言い方があると思われる。たとえば、英語の例でいえば、

・I bought a car.

という文は「車を買った」という事実を述べているが、

・I could have bought a car.

になると、実際には「車を買わなかった」ことになる。

しかし、日本語の場合を考えてみると、事情はこのようには単純ではなさそうである。たとえば、同じ「あの試合は日本の勝ちだった」という文でも、

・（思ったとおり）あの試合は日本の勝ちだった。

となれば、実際に日本が勝ったことになるが、

・（あのミスさえなければ）あの試合は日本の勝ちだった。

となれば、実際には日本は勝たなかったことになる。つまり、日本語では同じ述語形式であっても、文脈や状況により、その内容が実質逆になることがあり得るといえる。

本稿では、このように過去や現在の事実とは反対のことを表す言い方を「反実仮想」とよぶことにし、その試論のひとつとして、日本語にはどのような反実仮想的表現形式があるのかについて、1．熟語的表現、2．ル形、タ形などのテンス．アスペクト形式、3．その他の形式、の3つの観点から、主要な表現、用法を提示、記述してみたいと思う。

尚、例文には、必要に応じて、英語訳も付記した。また、本稿でいう反実仮想とは、原則的に話し手が過去や現在の事実とは反対のことを想定している場合であるから、たとえば「あすは雨だろう」「早く行くべきだ」のように、事実に対する話し手の心的態度（ムード）を持つものであっても、事実と反対のことが話し手の中に明確に想定されているとは言い難いものは、考察の対象外とする。

2．反実仮想を表す熟語表現

2.1　「Vすべきだった」のタイプ

まずはじめに、「～すべきだった」あるいは「～すべきではなかった」という言い方をとりあげてみよう。これらの表現は「～すべきだった（のにそうしなかった）」「～すべきではなかった（けれどもそうしてしまった）」というように、過去の出来事とは反対の事を想

定し、済んでしまったことに対する話し手の後悔や反省の気持ちを表しており、ここでいう反実仮想的表現の典型的な例のひとつであるといえよう。これはちょうど英語における 'should have done' に相当するものと思われる。以下に例をあげる。

(1) はじめに彼の意見を聞くべきだった。
(We should have asked for his opinion first.)

(2) もっとたくさん映画をみておくべきだった。
(I shold have seen more movies.)

(3) 君はそんなことをすべきではなかった。
(You shouldn't have done it.)

2.2 「Vかもしれない」のタイプ

これは述語の夕形、テイタ形に「かもしれない [しれなかった]」が続いた形で、過去の事実とは反対のことを想定し、その起こりえた可能性を述べる表現である。英語における 'could [might] have done' といった言い方に相当するものと思われる。

(4) 急げばバスに間に合ってたかもしれない。
(If I had rushed,I could have caught the bus.)

(5) あと一歩で命を落としていたかもしれなかった。
(With one more step I might have died.)

(6) あの反則がなければ彼らの勝ちだったかもしれない。
(Without the foul they would have been the winner.)

2.3 「Vところだった」のタイプ

これは多くの場合「あやうく」「もう少しで」などの修飾語句を伴って、ある出来事が起こる寸前の状態であったことを表す言い方である。この場合も、実際には起こらなかったことが、あたかも起こり得たかのように想定され、話し手の危機感や安堵感といった気持ちが反映される。これも一種の反実仮想的表現に数えられよう。一般に、危機感を伴うような否定的な出来事が話題となることが場合が多く、例文(10)のように肯定的な出来事（の不完了）に対する無念さを表す場合には助詞「のに」を伴うのが自然である。

(7) あやうく溺れるところだった。
(I nearly drowoned.)

(8) もう少しで車にはねられるところだった。
(I was almost hit by a car.)

(9) 急がなければ、バスに遅れるところだった。
(If I hadn't rushed, I would have missed the bus.)

(10) あと1点で勝てるところだったのに。

(I could have won with one more point.)

2.4 「Vばよかった」のタイプ

これも過去の出来事に対して「こうすればよかった」あるいは「そうしなければよかった」といった後悔の気持ちを表す言い方である。意味的には2.1と類似しているが、スタイルとしてはより口語的である。尚、「〜よかった」に先行する動詞の活用形は、このほかに「Vても」「Vたほうが」などのバリエーションが考えられる。

(11) その本を読んでおけばよかった。

(I should have read the book.)

(12) あいつを呼んでもよかったね。

(We should have invited him, shouldn't we?)

(13) あんな脂っこいもの食べなきゃよかった。

(I shouldn't have eaten such greasy food.)

(14) あの車買っておけばよかった。

(I should have bought the car.)

2.5 「Vばいいのに」のタイプ

これは2.4「Vばよかった」の一種と思われるが、「Vばいい［よかった］」に、助詞「のに」がついた形である。「Vば」の代わりに「Vたら」「Nなら」といった条件形も考えられる。過去や現在あるいは未来に起こりうる事柄と反対の願望を表すことが多い。

(15) 雨が止めばいいのに。

(I wish it would stop raining.)

(16) あなたが私の先生ならいいのに。

(I wish you were my teacher.)

(17) 君も来ればよかったのに。

(You should have come.)

尚、助詞「のに」は2.1〜2.4の主な用法では必ずしも必須ではなかったが、ここでみた用法2.5では必須となる。それは、次のように、例文(15)(16)(17)から「のに」を削除すると、やや座りの悪い文となることからも明らかである。

(15') ？雨が止めばいい。

(16') ？あなたが私の先生ならいい。

(17') ？君も来ればよかった。

また、この種の表現の特徴として、次のように、間投詞「なあ」をつければ、「いいのに［よかったのに］」は省略可能となる点があげられる（これについては後述する。）

(18) 雨が止めば（いいのに）なあ。

(19) あなたが私の先生なら（いいのに）なあ。

(20) 君も来れば（よかったのに）なあ。

以上、反実仮想を表すと思われる熟語表現をいくつかとりあげた。

3．テンス・アスペクト形式について

3.1 タ形の機能

タ形がある文脈、状況によって反実仮想的機能を担い得ることは、すでに指摘されている。たとえば、寺村(1971)は、タ形のもつムードのひとつに「過去に実際に起こらなかったことを、起こり得たことと主張する」用法があるとして、次のような例をあげている。

(21) あの人が刑事事件にしなかったら、会社は潰れなかった。(P.335)

(22) 広島側は野球ルールを引いて「妨害がなければ捕球できた」と抗議。(P.336)

(23) スミス機長は「…私ならすぐいうことを聞いて平壌に飛んだ」という。(P.336)

これらの例も過去の事実の反対を想定しており、本稿でいう反実仮想的表現に相当するものといえる。さらに、同寺村(1971)には、「過去に実際しなかったことを、すべきであったと主張・回想する」タ形の用法として、次のような用例があげられている。

(24) あそこは買いだった。(P.337)

(25) ［将棋の感想戦で］そんなら9二竜ではなく7四竜だった。(P.338)

これらの例も「～すべきであったのに、実際にはそうしなかった」という過去の事実とは反対のことが述べられており、ここでいう反実仮想表現に含められるものと考える。ただし、寺村氏自身もことわっておられるように、このような機能をタ形が発揮するためには条件節が先行したり、それにふさわしい文脈、状況が存在するといった外的な条件が必要となる。その意味でこれらのタ形は、前節でみた熟語表現に比べ、やや消極的、場面依存的ではあるが、少なくとも反実仮想を表し得るという点は事実である。

3.2 ル形、テイル／テイタ形の機能

ところで、このようなタ形と同様、その他のテンス・アスペクト形式であるル形やテイル、テイタ形でも、先行する条件節や文脈によっては現在や過去の出来事に対する反実仮想を表すことが可能である。以下の例をみてみよう。

(26) あいつが生きていたら、ちょうど二十歳だ。

(If he were alive, he would be just twenty.)

(27) お金があれば、旅行するのに。

(If I had enough money, I would travel.)

(28) あの試合は絶対勝ってるよ。

(We must have won the game!)

(29) 彼が助けてくれなかったら、私は溺れていた。

(Without his help, I would have drowned.)

上の例の場合、(26)(27)は現在の、(28)(29)は過去の事実に対する反実仮想が表れており、その機能において、タ形の場合に劣るとはいえないと思われる。したがって、結論として、ル形、タ形、テイル形、テイタ形といった日本語における最も基本的なテンス、アスペクト形式であっても、条件節などの外的な要素に支えられることによって、反実仮想を表し得ると考えてよいであろう。

以上、ここでは従来指摘されてきたタ形に加え、ル形、テイル／テイタ形についても反実仮想を表し得ることを述べた。

4．その他の形式

最後に、これまでの用例ですでにでてきているが、「のに」と「なあ」について触れておきたい。まず、「のに」は、もともと接続助詞であり、

(30) こんなに寒いのに、元気一杯だ。

(31) 横綱なのに、よく負ける。

のように、「ある事柄から普通に予期する事と反対の事柄が起こる意を表す」(岩波国語辞典第三版 p.859) のがその基本的な用法である。そして、それが文末に来た場合は、

(32) あれほど注意しておいたのに。

(33) ずっと待ってたのに。

のように、「予期に反した結果になった事についての不満の気持ちを表す」(同 p.859) ようになる。本稿で扱ってきた反実仮想に関わるのは、後者の用法である。このように「のに」自体、予期に反した結果を表すわけであるから、先にみた熟語形式にせよ、ル形やタ形にせよ、事実と反対のことを想定して述べ立てる反実仮想の表現になじみ易いのは、ごく自然な現象であろう。この「のに」は、一部の場合を除き、反実仮想表現の必須要素とはいえないが、述語に後接して話し手の悔しさや無念さといったニュアンスを加え、その文が反実仮想形式であることをより明示的にする機能を持っているといってよいであろう。以下に、若干の用例を追加する。

(34) あなたも来ればよかったのに。

(You should have come with us.)

(35) 電話くれたら行ったのに。

(If you had given me a phone, I would have come.)

(36) お金があれば、旅行するのに。(=(27))

次に、間投詞「なあ」も「のに」同様、反実仮想形式に頻繁に現れる。主文末の述語に続く場合は、

(37) あの車買っておけばよかったなあ。

のように単独で用いられることもあれば、

(38) お金があれば、旅行するのになあ。

のように「のに」に後接することもあるようである。ただし、すでに触れたように、

(39) 雨が止めばなあ。(＝(18))

(40) あなたが私の先生ならなあ。(＝(19))

と、条件節に直接後接する形をとった場合は、単独で用いられる。そのニュアンスとしては、現実に対する話し手の強い願望を表すといってよいであろう。

5．おわりに

以上、本稿では、日本語において反実仮想を表す、あるいは関与すると思われる表現形式について、熟語表現、ル形、タ形などのテンス・アスペクト形式、「のに」「なあ」といった助詞、間投詞に分け、簡単な記述を試みた。もちろん、これが網羅的であるとはいえないであろうが、少なくともその典型的なものをとりあげたつもりである。

今回は表現形式を提示するにとどまったので、今後は、個々の形式について、より精密な分析が必要であると考える。また、より基本的な問題であるが、反実仮想という概念を日本語のムードの中にいかにして位置づけるかという問題についても、今後の課題としたい。

参考文献

近藤泰弘（1988）「ムード」北原保雄（編）『講座日本語と日本語教育４』明治書院

寺村秀夫（1971）「‘タ’の意味と機能」（寺村（1984）所収）

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版

三上　章（1953）『現代語法序説』くろしお出版（復刊1972）